

【理工学研究科新領域創造専攻】

「ジェイン・ジェイコブズ生誕100周年記念国際ワークショップ」を開催しました

理工学研究科新領域創造専攻は7月31日（日）、「ジェイン・ジェイコブズ生誕100周年記念国際ワークショップ」を駿河台キャンパス・グローバルホールで開催しました。

今回のシンポジウムは、著書「アメリカ大都市の死と生」など20世紀後半の都市思想に多大な影響を与えたジェイン・ジェイコブズの生誕100周年を記念し、都市計画や経済学など専門分野を超えて彼女の都市思想の現代的な意義を問い直すというテーマのもと、開催されました。

ジェイン・ジェイコブズの遺志を受け継ぐニューヨークのジャーナリスト、ロバータ・ブランデス・グラッツ氏と、5名の国内主要大学の様々な専門の教授らが登壇し、会場は行政・省庁や大手企業の方、遠く京都大学からの参加者も交え、総勢158名の参加者で賑わいました。



シンポジウムはロバータ・ブランデス・グラッツ氏の「ジェイン・ジェイコブズの不朽の叢智:彼女の生涯と思想の独自性」という基調講演から始まりました。前半はジェイコブズが身の回りの環境をよく観察していたという話など、彼女にまつわるエピソードを説明。後半は会場からの質問に答える形式で、グラッツ氏がジェイコブズを知り彼女の思想を引き継ぐようになった経緯について語りました。1時間の質問時間の間、参加者からはグラッツ氏やジェイコブズに対する想いや疑問があちこちから挙がり、熱気に包まれていました。



続いてパネルディスカッションでは、各パネリストが互いの専門分野からジェイコブズの思想についての見識を示しました。内田奈芳美氏（埼玉大学准教授・まちづくり）は「ジェイコブズの思想をそのまま今のまちづくりに反映させるのではなくプロセス論としてとらえることが必要」と述べ、吉永明弘氏（江戸川大学准教授・環境倫理学）は、「ジェイコブズが人間観察という身近なところから社会批判に至った倫理的な知識人である」と説明。岡部明子氏（東京大学教授・建築環境デザイン）は「ジェイコブズが理想とした住み手による適応行動を許容し、包括する都市計画が必要」と主張、吉川智教（早稲田大学教授・経済学）は「古いものから生まれるイノベーションについて地域産業の土壌をふまえて計画を行うことが必要」と述べています。

これに対しグラッツ氏も「都市が経済の影響を受けて、ジェイコブズの観察してきた市民活動の積み重ねよりも早いスピードで次々に変化してしまっている」とした上で、「彼女は新しいことを作るよりも、感じたことを言語化することに主眼を置いていて、地域における本当の専門化はそこに長く住んでいる地元の人であるという考えのもとで人々への聞き込みを重んじていた。」と述べていました。

最後に、モデレーターの玉川英則氏（首都大学東京教授・都市解析）が「これからは時間の概念が都市を考える上でひとつの重要な要素になると提言し、都市論をきっかけに都市を再考していくことは有意義である」と締めくくりました。

参加者からは「ジェイコブズの意味を継ぐグラッツ氏の生の話を直接聞くことができ、貴重な体験になった。改めて地域に寄り添ったジャーナリズムの重要性について認識した。」「様々な分野からジェイコブズの提唱していた都市論について知ったことで、今の都市計画のあり方について考えさせられた。」といった意見があり、今後こういったイベントを通じて、都市に関わる多くの人々と多様な見地から理解を深め、共に考えていくことが重要であると感じました。

●イベントの概要●

日時：2016年7月31日

場所：明治大学駿河台キャンパス・グローバルホール（グローバルフロント1階）

参加者数：158名

主催：ジェイン・ジェイコブズ研究会（会長：塩沢由典）

共催：明治大学大学院理工学研究科新領域創造専攻

助成：公益財団法人大林財団

後援：公益社団法人日本都市計画学会、認定NPO法人日本都市計画家協会、進化経済学会、地域活性学会、NPO法人粋なまちづくり倶楽部、NPO法人向島学会、藤原書店

問合せ先：明治大学都市計画研究室 044-934-7390

（文責：都市計画研究室 向山直登）